

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.177

November 2011

本と生きる

山 田 史 郎

移民や人種混交の研究の傍ら、書物の歴史について細々と調べてきたが、その際にいつも胸躍るのは、情熱を込めて本に接し、それを愛おしみ、時には本を理解するのに苦悶する人々の実直な姿を発見したときである。活字によって独立直後の共和国の危機を救おうと勢い込む出版業者、意匠を凝らしたワシントン伝記を自ら著して売り込む書籍行商人、数少ない書物を暗記するまで苦行のように繰り返し読み込む巡歴説教師、アルマナックの欄外に日誌のように日々の出来事を書き込む僻地の農民など、本と生きる人々の謹厳な姿は、常に新鮮な感銘を与えてくれた。この感動を学生に伝えたくて、ミネルヴァ書房から寄付をいただき、勤務する大学で「書物と読書の歴史」と題する授業を今年度新規に開講している。

東日本大震災の発生から約3週間後、『日本経済新聞』関西版夕刊のあるコラムに、推理作家の有栖川有栖氏が「読書ができる日を」と題したエッセーを書いた。避難所の体育館で文庫本を読んでいる女性がテレビに映った。震災後本を読んでいる被災者の姿を見かけたのはそれが初めてだったという。水さえろくに飲めない生活が続いたあとで、ようやく本を読む時間が持てたのであろう。氏は、作家としての真情を次のように吐露する。「その方がどんな本を読んでいたのかは判らない。苦痛を伴った退屈をしばし忘れるため、『読みたくもないのだけれど、他に何もできないから』と仕方なく手にした本かもしれない。しかし、どうせなら、それが心に安らぎや楽しみをもたらすものでありますように、と祈った。」エッセーを閉じる次の言葉もまた、作家たる者の心の底から発したものであることに疑いの余地はない。「誰もが、好きな時に好きな場所で好きな本や雑誌を読める日が早くくることを願ってやまない。」

歴史に照らしてみると、有栖川氏が願うような読書ができる日は、昔からそれほど普通にあったわけではない。「誰もが読める」ためには、低年齢からの識字教育が社会に普及していなければならないが、18世紀以前

の世界では決して一般的ではない。老人には老眼鏡を、目の不自由な人にはたとえば点字の書物を社会が提供できるようにになっていないといけない。「好きな時に好きな場所で好きな本を読める」というのも、歴史をみれば、その達成がけっして容易ではなかったことがわかる。出版・流通・販売の態勢が不平等や不均衡なく、あまねく社会に行き渡っていないからではない。あるいはまた、禁書や検閲という権力の介入がなかった時代や社会を挙げることの方が難しいくらいである。もちろん、暗闇で本は読めないから、なんらかの灯りが整っていることも条件となる。人間は、こうした様々な障害を乗り越えるなかで、本を大切に慈しむ生活、本と生きる文化を創り上げてきたといえる。

今年の読書週間の標語は、「信じよう、本の力」であった。読書週間に寄せた主要各紙の記事・論説は、「活字文化を通じ心の復興を」（読売）・「本は心への『復興支援』だ」（産経）などと表題を付して、震災からの復興に果たす書物と読書の役割を強調していた。

昨年、書物（史）に関する思いのこもった2つの出版企画が欧米で完結した。ひとつは、American Antiquarian SocietyのもとでDavid D. Hallが監修者となって2000年から刊行が始まり、幾多の曲折を経て完結にこぎつけた*A History of the Book in America*のシリーズ（全5巻）である。各巻そろって、読書・読者の姿を描写することに多くの精力を費やしている。ふたつ目は、書物に関する百科事典的な知の大成をめざした*Oxford Companion to the Book*（全2巻）である。27カ国398人の専門家による51論文・5160項目には、くさび形文字の粘土板から電話帳や飛び出す絵本にいたるまで、著作権や識字率という書物を考える際に不可欠な事象はもちろんのこと、しおり、ジャケットカバー、紙魚、欄外書き込みまでが含まれる。本と生きてきた人間の文化の広がりや深さと多様性にふれることができる。

（同志社大学）

『アメリカ研究』第 47 号原稿募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は、2013 年 3 月に第 47 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文、もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することは出来ません。これは、なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で 8 ページ以内。ほかに英文レジュメ（500 語）。執筆要項は、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日 2012 年 9 月 4 日（火）。学会事務局に必着のこと。
4. 提出部数 3 部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は、2012 年 6 月末日までに、氏名・所属、論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第 47 号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第 47 号の特集テーマは、「アングロ・アメリカ」と決まりました。

「特集」に執筆希望の会員は、2012 年 6 月末日までに、氏名・所属、論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際の Subject は、「『アメリカ研究』特集応募」と明記してくださるようお願いいたします。原稿については、学会ウェブサイト（<http://www.jaas.gr.jp>）上の執筆要項をご覧ください。締め切りは、2012 年 9 月 4 日（火）必着です。

『英文ジャーナル』第 24 号原稿募集のお知らせ

The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 24th issue (June 2013) of the *Japanese Journal of American Studies*. Papers on any topic within the field of American Studies, including those related to this issue's special theme, "War," are welcome.

This issue will explore the theme of "War" from a wide range of disciplinary perspectives. In general, we welcome papers that shed light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economics, law, space, art and architecture, and uses of electronic communications media.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), are due by January 16, 2012, and should be sent to the JJAS Editorial Committee, JAAS, c/o Center for Pacific and American Studies, University of Tokyo, 3-8-1 Komaba, Meguro-ku, Tokyo 153-8902. Completed manuscripts will be due May 10, 2012 (maximum 8000 words, including notes.) Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue. The JJAS style sheet can be obtained from the JAAS homepage. (<http://www.jaas.gr.jp/english/>)

Juro Otsuka, Editor-in-Chief, *The Japanese Journal of American Studies*

アメリカ学会清水博賞第 17 回公募のお知らせ

故清水博会員およびご遺族からの寄付金を基金として、「アメリカ学会清水博賞」が 1996 年度から設けられております。同賞は、若手会員による最初の単著として刊行された研究書のなかから特に優れた作品を毎年 1 点ないし 2 点程度選び、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

今回の審査に向けて会員諸氏のご協力をお願いいたします。まず、当該期間（2011 年 1 月 1 日～2011 年 12 月 31 日）に刊行された著書で、該当する研究書にお気づきの会員（自薦も可）は、2012 年 1 月 10 日までに件名「2011 清水博賞候補推薦」にて事務局（office@jaas.gr.jp）宛にお知らせください。

清水博賞選考委員会

アメリカ大使館賞の募集ー日本で学ぶ大学院生対象の旅費援助奨学金ー

アメリカ合衆国大使館からの特別基金提供による旅費援助奨学金の募集を行います。ミルウォーキーで開催される OAH (Organization of American Historians) の年次大会に 1 名の大学院生を日本から派遣します。

期間：2012 年 4 月 18 日-4 月 22 日

場所：ウィスコンシン州ミルウォーキー/フロンティア・エアラインズセンター

OAH ホームページ参照：<http://annualmeeting.oah.org/>

奨学金の金額：1,500 ドル

応募資格：

1. アメリカ学会の会員であること。
2. 日本の大学の大学院博士課程に在籍し、専任職に就いていないこと。
3. OAH 大会の開催時に日本からの旅費を要すること。
4. 日本国籍あるいは日本永住権を有すること。
5. 渡米時に 45 歳未満であること。

審査結果：2012 年 1 月末日までに、学会 HP 上で公表する予定です。

応募を希望される方は、以下の書類を 2011 年 12 月 25 日から 2012 年 1 月 14 日までの期間に、アメリカ学会事務局 office@jaas.gr.jp に e-mail で送ってください。なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「OAH 大使館賞応募 (2012)」と必ず明記してください。

1. 履歴書
2. 出版業績リスト (ある方のみ)。
3. 過去の ASA と OAH 年次大会への参加記録 (ある方のみ)。それぞれについて参加年、大使館賞受賞経験の有無、口頭発表経験の有無を明記すること。
4. アメリカ大使館が別に助成している日米協会の「米国研究助成プログラム」奨学金の受給記録 (ある方のみ)。
5. アメリカ研究へのあなたの関心と博士論文のための研究計画 (英語で 500-600 語)。
6. 今回の OAH 年次大会で口頭発表を予定している方は、そのペーパーのタイトルと簡略な要旨。

国際委員会

2011 年 ASA 年次大会のアメリカ大使館賞受賞者および参加費補助制度受給者について

2011 年 11 月にメリーランド州ボルティモアで開催される ASA 年次大会を対象とするアメリカ大使館賞の受賞者は、齋藤弘平さん (青山学院大学博士課程) に決まりました。

また、米国留学中の大学院生会員向け ASA 年次大会への参加費補助制度の受給者は以下の 5 名に決まりました。

小田悠生 (コロンビア大学)
廣田秀孝 (ボストン・カレッジ大学)
箕輪理美 (デラウェア大学)
森川智成 (ブラウン大学)
今井祥子 (テンブル大学)

国際委員会

第 46 回韓国アメリカ学会主催国際セミナー参加記

2011 年 9 月 24 日に開催された韓国アメリカ学会国際セミナー (ASAK) において、日本アメリカ学会 (JAAS) の代表として口頭発表をさせて頂く機会を得た。9.11 から十周年を迎える本年度のセミナーは、“A Decade of Reconfiguration: America and American Studies” と題し、ソウル市内中心に位置するコリアナホテルを会場に、英語と韓国語のセッションが半数ずつ、計 4 セッション 11 名による報告が行われた。筆者は『アメリカ研究』第 44 号掲載の拙稿を大幅に改訂した内容を発表した。例えば文化研究のセッションでは、(筆者の中心的題材でもあった) ドン・デリーロの作品におけるテロへの対抗言説、テレビドラマシリーズ『LOST』の語り分析、アメリカにおけるアジア女性のパフォーマンスを扱う三報告が行われ、研究対象は異なれど、近年のアメリカ文化に内在するトラウマの語りと時間性の問題、また身体性とパフォーマンスのヴィジュアルの問題といった問題意識は一貫しており、9.11 以降のアメリカ文化研究の共通認識が改めて確認され、今後の文化研究が展望できたかたちになった。また、文学・文化の垣根を越え、領域横断的にアメリカ研究に参与しようとする発表者、コメンテーターの柔軟性も印象的であった。前日には、ソウル国立大学にて大学院生のためのワークショップと、松本悠子副会長による日本アメリカ学会の歴史を概観しアメリカ研究のあり方を提議する講演や、ヴァンダービルト大学から招聘されたゲイリー・ガースル氏によるアメリカの国家権力をめぐる講演が行われ、大学院生との活発な質疑応答が行われた。今回の派遣を通じ、関心領域の近い研究者と知遇を得たほか、韓国のアメリカ文化研究者やガースル氏とも意見交換を行うことができ、大いに刺激を受ける二日間となった。実りある体験をさせて頂いたことに心から感謝しつつ、今後もさらなる学術交流が進むことを祈っている。

(小澤英実)

牧野有道 編著

Melville and the Wall of the Modern Age

『メルヴィルと近代の壁』

(南雲堂, 2010 年, 4,571 円)

英語で書かれた本書は、日本のみならず広く海外の読者に向けて発信された書である。後書きで大橋も触れるように、1993 年 Greenwood Press より出版された *Melville and Melville Studies in Japan* が海外に向けた日本人による初めてのメルヴィル研究書とすれば、本書はその第二弾と言ってよい。ほぼ同数の執筆者は編者の牧野を除けば、すべてが新しく入れ替わり、日本におけるメルヴィル研究が着実に進められていることを海外に知らしめる好著である。

E. Schultz による序文があるが、第一章牧野論文が事実上の序文の役割を果たし、「近代」とは資本主義が帝国主義へと変貌していった時期を指すとし、メルヴィルを奴隷制、拡張主義、植民地主義など「不都合な真実」を批判した作家と位置づける。第二章高尾は、『タイビー』が政治的商業的権益と結託した宣教師による報告を巧妙に批判したものとの跡付ける。第三章舌津は、『白鯨』に潜むアメリカ南部性を指摘して南部ゴシックの一つと読むなど刺激的な論を展開する。第四章堀内は、イザベルのシャーマニズムに着目し、その異教的世界観がメルヴィルのキリスト教信仰によって抑圧されるとする。第五章齊木は「パートルビー」を語り手による貧しい書記の伝記と見なし、当時の偉人伝と比較することにより、資本主義批判を読む。第六章藤江論文も同作品を扱うが、壁はアメリカの資本主義を象徴するものとし、主人公をその犠牲者と読みながらも、再生の可能性にも触れる。第七章辻は「ベニト・セレノ」をスペインの植民地支配に関わる動乱や、アメリカ国内のスペイン恐怖症とも関連づけて読み、短編に歴史的奥行きを与えている。第八章橋本は、『信用詐欺師』に頻出する狂気への言及に着目し、乗客の信用を回復しようとする詐欺師の企てを 19 世紀アメリカにおける精神科医の治療行為と結び付ける興味深い議論を展開する。第九章佐久間は『クラレル』に登場する南部人アンガーに焦点をあて、南北戦争後のアメリカを懐疑的に見るメルヴィルの声を代弁するものとする。第十章真田は「リップ・ヴァン・ウィンクルのライラック」を扱って、なぜ韻文と散文という混合したスタイルで書かれているかと問い、近代における作家のジレンマを読み取る。第十一章大島は、メルヴィル晩年の詩に近代化に侵食される以前の至福に満ちた先住民への憧憬を読み取るなど、先住民への言及の分析は興味深い。

メルヴィルを近代化に直面した作家として位置づける全体構想のせいか、取り扱われる作品にやや偏りがあるものの、それぞれ独自の切り口で行われる各章の議論は、多種多様な資料を用いて説得力があり、メルヴィルという作家の多様性・複雑性を改めて認識させるものとなっており、今後どのような反応が海外から返ってくるか楽しみな一書である。

福岡和子（京大名誉教授）

安河内英光 編著

『アメリカ文学とパートルビー現象——メルヴィル、フォークナー、バース他』

(開文社出版, 2011 年, 2,800 円)

本欄は、すでに二氏により、「重要な結論を引きだし」、「圧倒的な駆動感と読むものが襟を正さずにはおれない緊張感」みなぎる文体で書かれた研究書と賞賛された本の紹介となる。メルヴィルを嚆矢に、フォークナー、オールビー、バースを扱い、アメリカという近代国家の問題をテーマにモダンとポストモダンの異相をも射程にいった論考に、読者は圧倒され引きいれられていく。主要な研究を参照しつつ、精読からその盲点をつく形で、著者の見解が示されていく手法には、爽快感さえ覚える。

著者の方針は、精読と歴史を行き交い、相反する要素の対立から生まれるものを見つけ出すというもので、『白鯨』では、エイハブの拘束服の記憶をベンジャミン・ラッシュの拘束服のイメージへと接続させ、アメリカの幽閉システムを明らかにする。「パートルビー」では、弁護士のもつ当時のアメリカ社会の要求する社会的職業的利己心とパートルビー自身が内部に抱える消極的ニヒリズムをあぶり出す。そして、社会と個人の問題は、モダニズム作家フォークナーの『八月の光』で、クリスマスの最後のメッセージともいえる、「自分の所在をグリムに知らせるように手錠でびかびか光る両手をのぞかせていた」言葉にならない言葉に注目した共同体の論理へとつながる。その読みの鋭さは、「黒衣の道化師」において孤独な人間ライダーの今まで看過されていた殺人を犯した後の眠りの分析でも遺憾なく発揮される。さらに、孤独な人間のあがきとして、アメリカの 60 年代を予測する作品として、オールビーの『動物園物語』がとりあげられ、中産階級の持つ自己欺瞞に無意識に囚われているピーターと、貧困と孤立の中にいるジェリーの出会いから、サトペンの欲望を分析した筆致で、ジェリーの抱える家庭崩壊と孤独な状況が明らかにされる。この流れから、「幽閉」というテーマが導く孤独で疎外された人間の姿が、近現代社会の経過を経て、それぞれの登場人物が共鳴するかのようになり、増幅されて浮き彫りになる。著者の読みは、「幽閉」という閉塞状況をキーワードにしてテキストの生産的な意味を提示していく。

しかし、最終章でとりあげられるポストモダン小説としてのバースの『旅路の果て』において、ポストモダン状況を体現する人物ホナーを通して、現代社会の行き詰まり状況を分析する時、思想が人物化した実験場としての作品分析が行なわれる。エイハブが白鯨に向けた復讐心を「筋違い」と一喝しつつ、そうせずにはいられないエイハブのおかれた状況をキャラクターに寄り添って説く小気味よさはなく、「モダンと実存主義とポストモダンの思想状況の問題点を浮き彫り」にする文学作品と述べる距離感に、まるで小説そのものが幽閉されていく今日の状況が浮かびあがってくるのではないだろうか。

本書は、アメリカと夢が同一視して語られた時から、アメリカが近代社会の問題そのものをあらわす状況となった現代までの道程を考察する上できわめて示唆の多い研究書であり、その作品分析の鮮やかさを迎える時、読む楽しさを与えてくれる批評書でもある。

佐久間みかよ（和洋女子大学）

高梨良夫 著
『エマソンの思想の形成と展開——朱子の教義
との比較的考察』

(金星堂, 2011 年, 4,500 円)

本書は著者が数十年をかけて追究したテーマの研究結果である。すでにその一部はアメリカの著名な学術誌 ESQ 等において発表されており、そうした論考を一冊の図書としてまとめたものである。高梨氏には、スティブン・ウィッチャー著『エマソンの精神遍歴-自由と運命』(南雲堂, 2001 年)の訳業等もあり、本書は比較思想的なアプローチを採用しながらも、その根底には著者のエマソン研究に対する「ブレない」姿勢と問題意識があったと思われる。

じっさい、本書の構想と文体を特徴づけるのは著者自身の地道で着実な研究姿勢にあるといっている。ひとつのテーマに対して、じっくりと執拗に食らいついていく、学者の本領ともいえる姿勢である。その目的は「エマソンの思想の特質を、新儒教、特に朱子の教義との比較的考察を通じてより明確に示そうとすること」(7)であり、「エマソンの根幹的思想の形成と展開の実相」(7)を整理しつつ、新たな論点を見出そうとしたことである。

あきらかに、本書の特色はその比較思想的なアプローチにある。これまでにもエマソンの思想と東洋思想との比較研究は様々に試みられたのだが、著者によると、朱子の教義との比較研究は先行例がなく「初めての試み」であるそうだ。さらに興味深いことは、本書がエマソンと朱子の教義の概念のいくつかを対比するにとどまらず、「明治・大正期の日本において、エマソンの著作が何故熱心に読まれたのか、そしてそれと同時に何故日本人のエマソン理解が一面的になる傾向」(8)があるのか、そうした受容の諸問題をめぐる文化的な射程が示されている。

この比較思想のアプローチによってもっとも明確に浮かび上がったのは、エマソンの思想の道徳性と倫理性であったろう。そしてこれはエマソンの思想の展開を理解するうえできわめて重要な要素であったと思われる。教会の牧師から講演者へ、因習的な教義から『処世訓』(The Conducts of Life)へと至るエマソンの思想の展開を理解する際に宗教の世俗化は核心的な問題であったからである。

むろん、エマソンにおける「道徳的情感」(moral sentiment)は社会道徳のみに還元されるべき問題ではなかった。それは個人の魂と普遍者をつらぬく「法」であり「精神」であったはずである。そしてこのキリスト教の神の概念の進展と隠喩性は、朱子の「理」とエマソンにおける「理性」を対比することで一層明確に浮かび上がるのである。

本書は、しばしば抽象的な議論に陥りやすい比較思想の試みを、伝記的事実や社会背景を織り交ぜながらより具体的に解説し、その思想的背景の共通点を指摘している。むろん、著者の関心は対比そのものにあったのではなく、あくまでも朱子の教義を起点としてエマソンの思想の展開を整理づけ、より鮮明に浮かび上がらせることであったと言える。その意味において、本書はエマソンの思想を理解するうえできわめて優れた解説書ともなっている。

高橋 勤 (九州大学)

佐々木卓也 編著
『ハンドブック アメリカ外交史』

(ミネルヴァ書房, 2011 年, 3,990 円)

アメリカ外交史に関する優れた日本語の研究書や概説書は数多くある。しかし、建国からイラク戦争までの約 240 年に焦点を当て、主要な事件や出来事を時系列に整理・解説した事例集は少ない。本書は、ワシントンの告別演説や朝鮮戦争等、大学の授業等で説明されることが多い 107 の最重要事項を取り上げている。これら 107 の事項が 6 部に分けられ、大部分は見開き 2 ページ、特に重要な 16 の事項は 6 ページほどを割いて説明している。最新のアメリカ政治外交史の研究成果に基づきながら、簡潔に重要点を解説しているのだ。

本書はアメリカ外交史分野の最前線で活躍する 5 名の学者が執筆したものであり、アメリカ外交史を学ぶ者にとって待望のハンドブックであろう。

これら 6 部はアメリカ外交史研究における時代区分と考えられる。第 I 部は 18 世紀後半の独立戦争時から 19 世紀末、第 II 部は 19 世紀末から第二次世界大戦終結、第 III 部は第二次世界大戦終結から 1970 年代前半の冷戦の時代、第 IV 部は 1960 年代末から 1980 年代末の冷戦の変容期、第 V 部は 1990 年代のポスト冷戦時代、第 VI 部は 21 世紀を取り扱っており、アメリカが国際政治に絶大な影響を及ぼすヘゲモニー国家に君臨し、次第にその勢力が下降していく第二次世界大戦後の記述に多くのスペースを割いている。また、第二次世界大戦前に関しても、38 個の事項を割り当てる適切な目配りにより、アメリカ外交史の全貌を明らかにしている。

各部の最初には見開き 2 ページの「解説」があり、各時代区分の全体像を的確に描き出している。その後に続く事項解説では、「背景」「展開」「解説・意義」「参考文献」に分けるなど極めて整然とした構成になっている。また、複数の執筆者がいるにもかかわらず、編集方針が徹底されており、無暗に難解な語句を使うこともなく、わかりやすい表現がされているため、大変読みやすい構成になっている。さらに、巻末には F. D. ローズヴェルト政権からオバマ政権までの主要閣僚一覧、1775 年の独立戦争勃発から 2009 年のオバマ大統領就任までの年表、および人名・事項索引が付けられており、読者への便宜を図っている。

アメリカ外交史を学ぶ上で本書が果たした役割は、数多くの重要事項の中から、優れた研究者が 107 個の歴史上で重要な事項を厳選し、信頼のおける解説を施したことである。この 107 個の事項こそ、アメリカ外交史を学ぶ者が知っておかなければならない基本事項である。同時に、チャールズ・A. ビアードが的確に指摘しているように、歴史叙述は「信念の行為」である。5 人の学者は、これら 107 個の事項を選択するという「信念の行為」を我々に提示したのである。読者は、単に 107 個の事項の内容を吸収するだけではなく、この「信念の行為」を理解し、107 個の事項が選ばれた理由、思想的枠組み、その意義を考えるという課題が与えられた。本書はアメリカ外交史の入門者にとって最適のハンドブックであると同時に、専門家にとっても咀嚼することで知的刺激を受けることができる良書である。

杉田米行 (大阪大学)

入子文子 編著
『英米文学と戦争の断層』

(関西大学出版部, 2011 年, 2,600 円)

戦争文学は、ある種の葛藤状態の中で語られるジャンルである。そこでは国家の維持・拡大を目的とした戦争の破壊的暴力行為が正当化される一方で、共同体の内部には尊い人命を国家に捧げざるを得なかった悲しみの物語が取り残されてしまうのだ。作家は公の歴史からこぼれおちた個人の物語をすくい上げ、すでに言語で意味づけられ正当化されてきた公式の物語を、異なった視座で語り直す役割を担う。本書は、英米の戦争文学をこのような切り口で考察し、「死と背中合わせに存在する我々自身の生の問題」(入子文子)へと「知」の活動を促す企画にその際立った特色があると思われる。

本書は三部構成十一章から成っており、戦争の歴史という地層を古きから新しきへ辿るように主題となる戦争が年代順に配され、トランス・アトランティックな文脈から考察されている。第一部「昔々の戦争」は、イギリス近代国家の戦争が挙げられている。まず『ヘンリー五世』の対仏戦争において、王でも制御不能な戦争の暴力の本質を示唆した藤田實のシェイクスピア論に始まり、スペイン継承戦争に対する当時の反応を戦争詩から分析し、「崇高」の理論をめぐるホイッグ系とトーリー系の言説を説いた西山論が続く。続く入子論では『英国ノート』を中心に、ケベックの戦いで命を落としたジェイムズ・ウルフにホーソーンが共感した理由を、同時代の軍人と比較したうえで洞察する。

第二部「前世紀の戦争」においては、南北戦争から第二次世界大戦までが網羅されている。ディケンズの奴隷制における態度を『アメリカ紀行』から読み解いた吉田論、南北戦争では傍観的立場を取っていたジェイムズが一転、第一次世界大戦で行為者へと変化した動因を「身体の傷」に重ねて論じた中村論が続く。さらにコンゴ体験に基づく「闇の奥」で、コンラッドが人間の奥に潜む「闇」の正体に迫った松村論、続いてベケットが早くから第二次世界大戦の死者の声に耳を傾けていたことを、井上論は散文群とダンテの『神曲』との類比からあぶり出す。

第三部「当今の戦争」では、極限状態での暴力に立ち会った人々が、いかにしてその事象に折り合いをつけるかという視点に論考が移る。安川論は、ラテン語の典礼文にオーエンの反戦英詩を組み合わせたブリテンの『戦争レクイエム』を世界平和の観点から読み解いた。続いてオジックの『ショールの女』を歴史の再現としてではなく、一女性の狂気から癒しへと向かう「脱ホロコースト文学」として分析した八瀬論、9.11の同時多発テロを扱ったデリーロの『墮ちてゆく男』を、佐々木論では生還者キースではなく妻のリアンの「見つめる」という行為から探る。そして最終章の宇佐見論では、日本の英米学研究者が戦前・戦後にとった言動を鑑みたくうえで、学術研究活動の意義と我われ研究者の責務を問うている。21世紀の今、このタイミングで戦争という事象をグローバルな視点から読む味わい深さに加え、「知」を活性化する体験へ我われをダイレクトに誘ってくれるという意味において貴重な一冊である。

小宮山真美子(長野高専)

松本幸男 著
『建国初期アメリカ財政史の研究——モリス財政政策からハミルトン体制へ』

(刀水書房, 2011 年, 6,930 円)

ロバート・モリスは財務総監として独立革命末期の連合会議財政の再建に取り組み、一定の成果をあげた人物である。しかしながら、財務総監の職を引き受ける際に自分のビジネスを兼務することを認めさせたように、当時より私益に貪婪と見なされ、1790年代には投機の負債により投獄されるなど、後に不遇の生涯を送った。そのため、合衆国初代財務長官アレグザンダー・ハミルトンに比べ、その人物・政策に関する評価は決して高くない。

本書は、そうしたモリスによる財政構想が、実はワシントン政権下のハミルトンに受け継がれ、「ハミルトン体制」によって結実した、という政策構想の連続性を明らかにしたものである。

いわゆる「ハミルトン体制」の先駆としてのモリス財政政策に関する第Ⅰ編と、モリス財政政策が同体制に及ぼした影響について検証する第Ⅱ編の二部構成であり、前者が全体のおよそ3分の2を占めている。

本書によれば、モリスもハミルトンも、ジェイムズ・ステュアートの『経済原理』における「私益を誘導して公益の実現をはかる」という政策原理に従い、貨幣資本家層の利害に訴えることによって中央政府の強化という公益の実現を目指した。すなわち、モリスの財政政策も、単なる連合会議の財政再建にとどまらず、中央政府たる連合会議に課税権を付与し、中央政府租税を基金として戦時公債の償還を行うことによって公信用を確立、それをもって弱体な連合会議を強力な中央政府としようとするものであった。

もっとも、モリス財政政策から「危機の時代」を経てハミルトン体制に至る時期を通じ、公債所有者が合衆国憲法制定の主要な利害階層であったとする本書が描く時代像は、ビ어드以来の特に目新しいものではない。また、第Ⅱ編においてハミルトンの製造業政策を公信用の確立・維持を「達成するための一手段」(234頁)であるとする点にも疑問が残る。

しかしながら、モリスの租税政策における地租に対する反発が、ハミルトンをして地租導入をためらわせたとする考察、およびモリスによって設立された北アメリカ銀行こそが、後年の第1次合衆国銀行や19世紀初期のニューイングランドにおける商業銀行の先駆となるものであったとする考察は、これまでのハミルトン体制研究を補完するものとしても、大変興味深い。

「後発国アメリカにおける資本主義の原始的蓄積過程」を明らかにするという分析視角は古典的ではあるが、本書が田島恵児氏の「ハミルトン体制」研究の流れを受け継ぎ、建国期財政史に正面から取り組む極めて重厚で骨太なものであることは間違いない。建国期合衆国史を学ぶ後進にとり、極めて貴重な一冊である。

田宮晴彦(広島経済大学・講)

山里勝巳 編著

『移動』のアメリカ文化学』

(ミネルヴァ書房, 2011 年, 3,000 円)

野田研一 編著

『風景』のアメリカ文化学』

(ミネルヴァ書房, 2011 年, 3,000 円)

笹田直人 編著

『都市』のアメリカ文化学』

(ミネルヴァ書房, 2011 年, 3,000 円)

本シリーズ、「アメリカ文化を読む」(全3巻)の目次を開いた瞬間、「You've come a long way, baby.」という懐かしいキャッチコピーを思い出した。1950年代にアメリカ研究の古典と言われる Henry Nash Smith, *Virgin Land* (1950), R. W. B. Lewis, *American Adam* (1955) などのいわゆる “myth and symbol” 学派の登場以降、移動や風景はある意味古典的なテーマだった。しかし、わたしたちは、すでに1960年代以降のアングロ＝アメリカ中心主義への批判を経た地点にいて、もはや同じ場所から語ることができない。このテーマはいま、どのように再定位されうるのだろうか。

本シリーズもこうした流れを意識せざるを得ないところにみずからを位置づける。アメリカを「ひとつの巨大なプロブレマティックス」、複合的な現象と捉えたうえで、移動、風景、都市という3つのテーマが、アメリカの移動性、越境的性格、風景感覚、都市表象に分かちがたく絡まっているゆえに、こうした視座がアメリカの「成型」のありようをめぐる歴史と構造を解明することに資するとし、時にこれらの概念の定義や生成過程に果敢に踏み込んでいく。3巻それぞれがまとまりを持ちつつも、一篇一篇が近年の研究動向を踏まえながらアメリカという環境と文化が複雑に相互交渉する様を切り取ることに成功している。以下、紙幅の制約で詳細な紹介は到底叶わないが、このシリーズの姿を紹介したい(著者名は敬称略)。

第1巻は、西への移動や移民の移動だけをもって移動とするのではない広く深く複雑な移動の相と意義を考察しようと試みる。第I部は移動、および境界概念そのものを問いに付す野心的なパートである。南から北への移動ベクトルと、境界のあいまいさと、それがもたらす磁場としての「境域」概念(喜納育江)、「ノーチラス」号の系譜から深海がナショナリズムともにフロンティア化される言説を扱う山城新の議論、移動の概念そのもののラディカルな問い直し(高橋勲)は、移動パターンの再検証などの課題を突きつける。第II部は具体的に移動がもたらす変容を鉄道(成田雅彦)、自動車(小谷一明)、ロード・ナラティブなど(渡久山幸功)あらたな移動メディアがもたらす認識と価値観の生成という点から詳細に分析する。ウィルダネスを心理描写として(高田賢一)、移民から見た都会(楠元実子)として拡大していく第III部に続く第IV部は、移動のスペースをさらに拡大する。アジア系アメリカ人にとっての移動を、支配的白人社会の思惑で動かざるを得ない不安な存在状態とするダレル・Y・ハマモトや、普遍的理念の伝播として構想される帝国化を、国内のカラーラインを海外で再演する必要性とともに笹田直人の議論は、アメリカの白

人中心主義の複雑さをあらためて浮き彫りにする。SFや宇宙計画を交錯させつつ、地球と生を考えると、アメリカ人はむしろエイリアンかもしれないだ(パトリック・D・マーフィー)。

第2巻は、風景をめぐるラディカルな論集である。風景とは、風景画の教育によって、現実風景を見出す認識かつ表象であるからには、それは時としてナショナルなものとしてイデオロギー的なものにも、また個人や集団の抵抗の拠点にもなるだろう。第I, II部では、コロンブスからゲーリー・スナイダーに至る地名のポリティクス(山里勝巳)、アンセル・アダムズが再演するアメリカ的な風景(日高優)、アメリカ的な主題と主体形成に関与するものとしてのホワイト山脈の歴史的位相(藤村希)という、国家形成と不可分のテーマを扱う論者群に対して、「農」の風景が孕む抵抗の可能性(結城正美)、南部の女性作家と環境の相互干渉とその独自のグロテスクな風景(後藤和彦)、ゴーストタウンの真正性をめぐるパラドクス(波度岡景太)といった、むしろナショナルな全体性に抗うフィールドをめぐる議論が配されている。第III, IV部は風景の想像力を巡る議論であり、ポップコーンやナイアガラのアイコンとしての移動性(中村邦生)、ヘミングウェイに刻み込まれた「まずアメリカを見よう」キャンペーン(小笠原亜衣)、死を覆い隠すかのような19世紀半ばの庭園墓地(黒沢眞里子)、『ビーチ』をはじめとするハリウッド映画における楽園のアメリカ性(塚田幸光)など、多様な議論のあとに置かれた管啓次郎論は、むしろ風景表象のイデオロギー性を攪乱しかねない無媒的な「エレメンツ」を提示する。

第3巻第I, II部では、ニューヨークの多様な複雑な相貌をめぐる力強い論考群である。19世紀半ばのリップバードら大衆小説家が描く悪徳とその告発(白川恵子)、世紀転換期の不安を反映した都市イメージと、それを隠蔽する「オズ」の表象(細谷等)、「見えない人間」を足がかりに論じられる、アイデンティティ政治の限界を破る都市の潜勢力(松本一裕)、管理の欲望、攪乱の契機などパフォーマンスな諸力がせめぎ合う空間としてのタイムズ・スクエア(外岡尚美)、ゲッターを舞台としたヤングアダルト小説(堂本かおる)。第III, IV部では都市観そのものが問いに付される。シカゴとロサンゼルスをめぐる、言説としての学説(武アーサー・ソーントン)、解放空間としてのサンフランシスコ(山越邦男)、模造都市ヴェニス(小野俊太郎)などはメタ都市論と言える水準を秘め、郊外を19世紀末の都市化の産物とする野田研一の議論やトウモロコシ畑の管理された整然に潜む都市の論理(結城正美)や都市と児童文学(高橋尚子)は、都市とは何かを、あるいは都市・田舎という二項対立の構図の再考を迫る。

おのおの刺激的な論考だが、さらに加えるならば、本シリーズの醍醐味は、多様な論文の重ね読みだと思う。たとえば第3巻の第I, II部を一気に読めばニューヨークのパリンプセスト的な歴史のみならず、そこを諸力のせめぎ合う重層的な空間としてあらためて感じることができるし、またそこに蠢く力の可能性という点では、第2巻の管論文や第1巻の喜納論文とも響き合うだろう。あるいは農、トウモロコシをキーワードとして横断的に論文を選択することもできる。アメリカ文学のひとつの実りを、多様な楽しみ方を開くシリーズに仕上げてくれた編著者のエディタースhipとともに味わいたい。

越智博美(一橋大学)

上智大学アメリカ・カナダ研究所 編 『キリスト教のアメリカ的展開——継承と変容』

(上智大学出版, 2011 年, 2,400 円)

本書は、上記研究所の共同プロジェクトで、北米研究に携わる 10 名の研究者（米国 2 名、日本 8 名）による学際的な研究書である。その通篇低音は、「アメリカという特殊な環境と土壌」（序論）におけるキリスト教の継承と変容を描くことである。所収論文のうち 8 本（I, IV～X 稿）は研究所の共同研究「キリスト教のアメリカ化と社会文化生成についての研究」の成果報告が基となり、残りの 2 本（II, III 稿）は日本ピューリタニズム学会のシンポジウムから生まれている。各論文は、植民地時代から今日までの歴史を視野に入れて、アメリカにおけるキリスト教の特徴と、社会、文化、政治との関わりを論じるという目的を共有して執筆されており、キリスト教の動向や趨勢が、アメリカの社会や政治と複雑に絡み合ってきた現実を痛感させる。読者は、その認識抜きでアメリカの種々の事象を語ることに謙虚でなければならないことを再確認するであろう。これ自体は何も新しい指摘ではないが、本書は今日それを再び肝に命じさせて余りある。その関連で言えば、筆者は、石川論文「ジョン・アダムズにとっての『ピューリタニズム』」、大塚論文「Enthusiasm をめぐる解釈の闘争」、金山論文「米国政治に反映されたキリスト教的価値観——共和党政権とメディアの関係」、ノール論文「プロテスタント福音派と近年のアメリカ政治」などから特に多くを学び、刺激を受け

た。

いくつかの訳語が原意とは異なって訳出されているように思われたり、人物の捉え方や出来事の解釈の視点に若干の違和感を覚えはしたものの、アメリカのキリスト教が自らの務めを自覚しつつ、国の誕生から今日に至るまで、その歴史の流れの中で自国の社会や文化の形成に果敢にかかわってきたその姿を、諸分野の研究者は意欲的に描き出し、本書を待望の、それも画期的な研究文献として完成させたことには変わりはない。概して、日本におけるアメリカ・キリスト教に対する関心は高いとは言えず、その理解も貧しいことが多い。耳を疑いたくなるような発言にたびたび遭遇するばかりか、アメリカの帝国主義的側面にキリスト教を安直に結び付け、アメリカ・キリスト教自体を否定的に論ずる人も稀ではない。それらの声に対して、本書は「アメリカという特殊な環境と土壌におけるキリスト教の継承と変容」（序論）の優れた事例を学的に淡々と紹介して止まない。賢明な読者ならば、日本のキリスト教が慢性的に抱えてきた課題について、そこから学ぶべき何かを発見するであろう。

英語論文には優れた邦訳が付されているが、できれば英語原稿も併せて入れていただきたかった。アメリカにおける社会的少数者（人種的、民族的、宗教的、昨今では性的少数者など）を射程にのらせた論文が含まれていないのも残念である。キリスト教はこれらの課題について一貫して発言し、政治的にも、社会的にも少なからぬ影響力を発揮してきた。この分野は、「キリスト教のアメリカ的展開」の研究には不可欠であると思うので、今後の研究に期待するものである。

金丸英子（西南学院大学）

2011 年度アメリカ学会年次大会分科会報告

於：東京大学

日米関係分科会

日米関係分科会（2011 年度）の前嶋和弘会員（文教大学）の報告「アメリカの選挙報道にみる日米関係——日米比較の観点から——」においては、“Japan”と“election”の 2 つをキーワードとして、アメリカを代表する新聞『ニューヨーク・タイムズ』の過去 25 年間にわたる紙面の詳細な内容分析がおこなわれた。その結果、合計 1,127 件の対象記事がヒットしたものの、その内訳は、1980 年代のものが大半で、90 年代前半になると、その数は 50 件前後にまで激減し、その後、90 年代後半からはさらに減少し、2000 年代に入ると、記事件数も 10 件台にまでなっていることがわかった。この動向は、日米間の経済摩擦問題の変遷と完全に軌を一にしているといえよう。このほか、前嶋報告では、記事件数の変遷の要因として、中国の経済的な台頭、記者や報道機関のバイアスといったものがあげられた。この報告に対して、フロアとのあいだで、活発な質疑応答が展開された。今回の報告は、日米経済摩擦とアメリカの新聞報道との密接な関連性を実証したという点で、きわめて意義深いものであった。なお、司会は藤本一美会員（専修大学）が、討論は浅野（浅野一弘）

アジア系アメリカ人研究分科会

報告者：仲田周子（日本女子大学現代女性キャリア研究所）

報告タイトル：日系ペルー人強制収容経験の社会学的研究——ライフストーリーからみる「集い」のかたち——

本報告では、第二次大戦中、アメリカ合衆国政府によって強制収容された日系ペルー人の強制収容の経験を、強制収容体験者が語るライフストーリーをもとに、また、強制収容所の再集団化集団であるペルー会を通して考察した。

報告に対して、大きく以下の三つ視点から質疑がおこなわれた。一つは、強制収容の歴史背景をめぐってのもので、ペルーからアメリカへの強制収容の詳細や、ペルー政府の補償責任などが確認された。二つ目は、体験者のライフストーリーに関するもので、語られたライフストーリーの具体的な内容、ライフストーリーとかれらのアイデンティティの関係について質問が出され、強制収容以降、アメリカ、日本、ペルーへと四散した日系ペルー人の経験の多様性をめぐって議論がなされた。三つ目は、現在のかれらを結びつける同窓会に関するもので、報告のなかで提示した強制収容の「出来事」の記憶に基づき集いの形は、日系ペルー人特有のものではなく、むしろ日系アメリカ人の補償運動の変遷として位置づけられるのではないか、という意見が出され、議論が交わされた。また、同窓会と日系ペルー人の補償運動の関係性、出発点となったペルーとのネットワークについての質問も出された。

（浅野京子）

冷戦史研究分科会

「ドイツ統一とアメリカ外交」をテーマとして森聯会員より、先行研究とは一線を画する、ブッシュ政権のドイツ統一外交を再評価する報告があった。同会員によれば、「二つのドイツ問題」にもかかわらず、関係国が合意に達することができたのは、次のような要因が作用したからだった。第一に、戦後のヨーロッパ統合の中で西独が「ヨーロッパ化」していたことで、米仏が「伝統的なドイツ問題」から解放され、また東独政府の崩壊が統一を既成事実化していく中で英ソも同問題の克服を余儀なくされた。第二に、ヘルシンキ原則が陣営を超えてソ連にも共有され、ゴルバチョフという西側の事実上の「協力者」がソ連国内の保守派と軍部を抑え込む政治戦術を採用し、それに必要な西側による対ソ安心供与策をまとめ上げる外交手腕をアメリカが有していたことにより、「東西間の安全保障の問題」が克服可能となった。討論者の倉科一希会員からは、ゴルバチョフが統一ドイツの NATO 帰属を認めた要因、「二重の封じ込め」という文脈の含意、ヨーロッパ統合とドイツ統一の関係についての指摘があり、フロアからはブッシュ政権の政策過程、米連邦議会の関与、アメリカの東独政策、ポーランド国境問題の扱いについて質問が出され、活発な質疑応答が行われた。(松田武)

アメリカ政治分科会

アメリカ政治分科会は「統合と表象——他者の視点の再認識」をテーマとして、観察対象との距離の取りかたと接近のしかたについて、微妙なバランスを意識しつつ、発生する政治変動の外的要因と内的要因とを検討する場となった。藤村好美会員は、ルイビルのシティ・カウンティ統合の過程を丹念に追うことで、多様な人々を代表する多層的政府の意義について注意を促し、ビジネス界主導の統合が与えるインパクト、すなわち住民の主体としての意識後退と消費者としての意識浮上について考察を行った。金澤宏明会員は、言語論的転回や方法論をめぐる論争の中で浮上してきた資料多様化への努力を背景に、19 世紀末キューバをめぐるアメリカ外交を説明するにあたって、未だ方法論が確立されていない政治カートゥーン分析の新しい可能性を提示した。どちらの報告も対象とする地域、分野の中に主流と他者を見いだす一般的説明にくわえ、もう一回り外に観察者としての他者を意識的に設定し、その視点の動きと変化を分析の中に巧みに織り込んでいたという点で、非常に興味深いセッションであった。もっと多くの参加者があれば、質疑応答もより広がりをもったものとなったか考えると、その点は残念だったと言わざるをえない。

(平体由美)

アメリカ先住民研究分科会

アメリカ先住民研究分科会では、藤田尚則氏（創価大学法科大学院）による「インディアン部族——その法的意味——」と題する報告が行われた。

報告では「インディアン部族」なる実体が合衆国史を通じ現代に至る迄にどのように定義づけられてきたのかについて、主として連邦政府による部族の「承認 (recognition)」とそれに基づく部族に対する連邦法の適用や裁判所の判断の事例を軸に、多くの関連法や判例を引用しながら詳細な分析が行われた。

これまで文化人類学、文学、社会学、歴史学等の研究者による様々な興味深い報告が行われてきた本分科会に、今回新たに法学面からのアプローチが加わった。アメリカ先住民部族（あるいは個人）の法的位置づけという極めて複雑な問題は、あらゆる分野のアメリカ先住民研究者にとって欠くことのできない基盤的知識であるにもかかわらず、日本では十分な知見を得る機会が少なかったきらいがある。その意味において、今回の分科会是他分野のアメリカ先住民研究者にとっての貴重な学びの場となったと同時に、日本におけるアメリカ先住民研究のより大きな範疇に包摂された学際的交流という意味においても、評価できるものとなった。

(岩崎佳孝)

経済・経済史分科会

山縣宏之会員（立教大学）から「航空宇宙からソフトウェアへ——「創造型企業都市」シアトルの軌跡——」とのテーマで報告をいただいた。以下は山縣氏による要旨である。本報告は、太平洋岸北西地域の産業都市シアトルの戦後産業発展プロセスを再構成した。シアトルはアメリカでも産業構成の「多様化」に成功してきた都市の一つである。1960 年代から 1980 年代にかけてのシアトルは、航空宇宙産業都市として発展した。そこで第一に、航空宇宙産業都市のしくみを、米国全域あるいはグローバルに生産が行われる大型民間航空機の生産システムの特性を踏まえ、ボーイング社が都市形成に及ぼすインパクトに焦点を当てて検討した。加えてシアトルでは 1980 年代以降、経済構造が著しくサービス化・ソフト化し、なかでもソフトウェア産業が存在感を増した。従って第二に、巨大企業マイクロソフト社と多様なソフトウェア企業の成長発展プロセスの検討を行った。創業者の地元志向、良好な居住環境とソフトウェアエンジニアの定着というシアトルでソフトウェア産業が成長した要因を浮き彫りにし、新しい企業を生み出し続ける「創造型企業都市」の一事例として現代シアトルを位置づけた。その後ボーイング社の事業展開とソフトウェア産業成長の関係、ボーイング社の本社移転の影響の評価等について活発な質疑応答が行われた。

(名和洋人)

文化・芸術史分科会報告

この分科会では、文化研究や芸術史のみならず、メディア研究や表象文化論といった新しい分野で研究を進めている若い研究者の受け皿づくりをしていきたいと考えている。前回の分科会では「アート概念の変容」をテーマにして3名の若手研究者による研究発表を行ってもらったが、今回はこの分野における若手研究者のネットワークづくりに主眼を置き、責任者である小林が「アメリカン・スタディーズの現状と未来」に関する報告をした後、参加者による自由な意見交換を行った。米国各州の財政難によるアメリカ研究プログラムの縮小や閉鎖、あるいは日本における大学教員ポストの減少など、若手研究者を取り巻く厳しい環境に関する議論や、この分野の教育を活発にし、かつ認知度を上げるために教科書を作成する必要性などについて意見交換が行われ、刺激的で大変充実した集まりとなった。今後はFacebook内の「文化・芸術史分科会」グループにおいて引き続き意見交換を行いながら、パネルの提案や教科書作りに繋げていければと考えているので、関心のある方はぜひそちらの議論に参加していただきたい。次回の分科会においては「展示/表象」に関する研究発表を予定している。

(小林 剛)

アメリカ女性史・ジェンダー分科会

今年度は京都大学大学院法学研究科学術創成研究員の小泉明子氏に「同性婚と『家族の価値』——合衆国文化戦争の一側面」という論題で報告していただいた。同報告は同性婚をめぐる論争を「文化戦争」の一環として理解し、その経緯を詳細に解説した。1971年より同性婚支持派は訴訟による権利主張運動を展開し、近年では法廷でその主張が認められてきた。他方、宗教右派を中心とした反対派は「家族の価値」を掲げてバックラッシュ運動を推進し、1996年制定の婚姻防衛法(DOMA)に至った。さらに2003年には、同性婚禁止の連邦憲法修正案も提案された。同性婚がアメリカにおいて深刻な政治的争点となる理由として、小泉氏は、同性婚の権利が「平等」尊重として要求されていること、アメリカの福祉制度の貧困ゆえに婚姻に付与される利益が無視できないこと、多様性に満ちたアメリカ社会における共通項としての「家族」の価値が強く求められる傾向があること、とくにこれが新自由主義的な「自助」「自立」の精神と親和性をもつことなどを指摘した。報告後に活発な質疑応答がなされ、現代アメリカ社会の重大争点に関する理解を深める貴重な機会を得ることができた。

(兼子歩)

初期アメリカ分科会

初期アメリカ分科会は本年は海事史をとりあげ、2つの角度から18世紀前半の大西洋世界に迫った。薩摩真介(早稲田大学(非))「スペイン継承戦争期のブリテン領アメリカ植民地における私掠奨励政策とその問題」はイギリス議会1708年制定の通称アメリカ法が私掠を奨励しつつ、私掠の弊害を扱う条項が多い錯綜した内容である点に着目、西インド商人でもスペイン交易への関与の有無により同法に求めるものが異なり、また水夫の脱走を防ぎたい海軍も関係していたことを論証、法案への対応はホイッグとトーリの対立では説明できないと論じた。笠井俊和(名古屋大学(院))「反抗的な船乗り・従順な船乗り」は船内の人間関係は厳しい規律とそれへの反抗に彩られていたとするレディカー説と、船乗りの行動には母港の地縁・血縁によってタガがはまっていたとするヴィッカーズ説の整合を試み、ボストンの船舶出入港記録と副海事裁判所裁判記録を突き合わせて検討すると、船乗りの反抗的行動が顕著になる最大の要因は船舶のサイズ(渡航先と相関がある)だったと報告した。20名あまりの出席者との間で活発な質疑が行われ、時間が限られていることが悔やまれる盛会となった。

(橋川健竜)

新入会員

森川智成	東京大学(院)	思
山田亜紀	カリフォルニア大学ロサンゼルス校(院)	民 教 衆
中島祥子	成城大学・横浜美術大学	女 文 衆
箕輪理美	一橋大学/デラウェア大学(院)	史 女 社
高良育代	東京大学(院)	社 民 教
西浦 徹	明治大学	文

編 集 後 記

ネオリベラル型グローバリゼーションは価格破壊と雇用破壊、そしてテロのグローバルな戦争を引き起こし、グローバルな経済・社会・文化・生存の格差を急拡大させてきた。まさにその震源地から「ウォール街を占拠せよ」をスローガンに、格差の拡大反対という新しい社会運動が全

米に拡大している。このようなグローバリゼーションに反対する「普通の人々」がインターネットの原理たる「公開・分散・共有」の上に、ネットを駆使し新しい民主主義を求めて立ち上がっている。「ネット後進国」日本の新しい運動は、どのような形態をとるのだろうか。

(k.s)

2011年11月30日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科附属

アメリカ太平洋地域研究センター気付

Tel & Fax (03) 5454-6163

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 紀 平 英 作

編集人 中 條 猷

印刷所 啓文堂松本印刷

〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12